

2022 年度学術研究助成（地理・地図・環境等に関する教育・普及を目的とした研究及び活動）

「地域まるごと博物館」の動画制作を通じた地誌的実習プログラム開発

浅野敏久・匹田篤・熊原康博・黒島健介
(広島大学)

I はじめに

1) 背景と目的

筆者らは、エコミュージアム活動や博物館展示研究を専門とし、それと関連して広島大学総合博物館の企画運営や実務に関わっている。一方で、総合科学部や教育学部で地域調査についての教育科目を長年担当してきた。本研究は、これらをつなぐ試みとして企画された。

広島大学総合博物館は、東広島市をフィールドとしてエコミュージアム活動を展開している。エコミュージアムは、地域をまるごと博物館とみなし、その中の自然・歴史・文化遺産を保全・活用する活動として日本では広まってきた。したがって「現場ありき」「住民重視」の姿勢を強くもつが、Covid-19の影響でインターネットを通じたデジタルコンテンツの発信にも力を入れるようになった。各地の博物館では、地域の自然や歴史、文化を紹介する動画コンテンツを制作し、発信する動きが急に広がっている。

一方、エコミュージアムを紹介する動画は、地域の特色をいかにとらえ、いかに表現するかが肝である。これは、地域に関する知識と情報を集め、その地域の特徴を提示する地誌学の在り方と共通する。また、地理教育においても、地域調査は重要な学習項目の1つに位置づけられており、地域調査のトレーニングとして、各教育現場でさまざまな工夫がなされている。ここで1つの切り口として、「動画を制作する」という課題を設けることを考えてみたい。これは地誌学習の手段として有効なのではないだろうか。

本研究では、動画制作を学生の地域調査の実習ととらえ、地域の特徴を掘り下げて紹介する動画を制作することが、いかに学生の学びにつながるのかを検討し、その課題や可能性を明らかにすることを目的とする。また、その成果物を公的に発信することで、学生のモチベーション向上につなげることも期待する。成果は大学の実習にとどまらず、高等教育地理科での地域調査の実践案や、ワークショップ型の公開講座などにも展開可能であり、本研究においては学校教育や社会教育での実践も視野に入れる。

動画制作を教育プログラム化する研究は情報教育や美術教育などで実績があるが、本研究は地域調査分野での実践と位置づけられる。教育としての地域調査については、池（2012）や河本（2017）、磯野・宮岡（2017）などの研究があり、河本（2017）は調査結果をウィキペディア編集や冊子作成に落とし込む実践例を報告している。しかし、地域調査の成果を動画化することを研究成果として報告した例は管見の限り見つけられていない。本研究は、動画制作の教育効果や授業に取り込む課題を明らかにすることをめざす研究である。とはいえ、単なる調査に留めず、成果を実際の授業に展開することを意識している。また、制作された動画は、総合博物館のYouTubeチャンネルのラインナップに加えられ学内外から視聴できるようにする。

ところで、以上に記した目的と異なる本研究の副次的な狙いについても述べておく。地理学では、情報化が進みバーチャルな空間が拡張していく中で、「距離」や「場所」「地域」などリアルな空間と強く結びついた学問上の重要概念への問い直しが行われてきた。なかには「距離」

は克服され「地域」は虚構となってしまうかもしれないという極論もあった。しかし、実際には、グローバル化が進んでも、それに応じてリージョナルな視点の重要性が強まったように、情報化が進みバーチャル空間が拡張しても、リアルな空間は意味を失わない。リアルかバーチャルかという二者択一ではなく、両者をどう接合させるのが問題なのである。これに関する議論は、地理学に限ったものではなく、情報学や建築学など幅広い学問分野における関心事でもある。博物館学や地域計画学、社会教育学などのニッチな部分に位置づけられるエコミュージウム研究においても、リアルな地域とデジタル技術を用いたバーチャルな空間との接合は1つの研究課題となっている。本研究は、動画制作を通じた地域調査教育プログラムを考案するとともに、制作した動画を広島大学総合博物館の「地域まるごと博物館」サイトから配信するというささやかな実践にすぎないが、実践を通じて得られた知見はリアルな地域とバーチャルな空間の関係を論じる上での素材となりうると考えている。

2) 調査方法

本研究は、動画制作に関わる地域調査を、実際に学生参加のもとで行い、その中での観察や学生へのアンケート調査により、動画制作を取り込んだ実習の可能性や課題を検討する。

そのために、学生を集めて動画制作プロジェクトを立ち上げる。プロジェクトチームは3つ、担当者の名前をとって、黒島・浅野チーム、熊原チーム、匹田チームとした。各チームは研究の遂行に関する情報共有を密に行い（月1回の定例研究会）、活動の記録を丹念にとることとした。調査の流れは次の通りである。

- ①地域調査についての意見・情報交換、地域調査のプログラム化に関する議論
- ②具体的なテーマやフィールドを決めて、学生参加による下見としての地域調査
- ③下見調査を踏まえての動画のテーマの検討・決定
- ④チームごとにシナリオや撮影・インタビュー対象の検討・決定
- ⑤現地での調査・撮影¹⁾
- ⑥画像の編集・校正→動画の完成
- ⑦参加した学生と参加しなかった学生を対象としたアンケート調査
- ⑧全参加者等による試写会による意見交換
- ⑨完成した動画の広島大学総合博物館のウェブサイトからの発信
- ⑩研究結果のとりまとめ（本報告）

なお、完成した動画は、広島大学総合博物館の YouTube チャンネルから配信している (<https://www.youtube.com/channel/UCIG-cL-8huBZ9f0sBM57cxQ>)。



II 3種の動画の制作過程と内容

3つのチームでそれぞれ動画を制作し、完成したものは6本となった。黒島・浅野チームが1本、熊原チームが1本、匹田チームが4本という内訳である。以下、それぞれのチームがどのように動画制作を進めたのか、また、その動画の内容がどのようなものなのかを記す。

1) 黒島・浅野チーム「安芸津ドライブ旅」

記：黒島健介

i プロジェクトの概要

広島大学総合博物館では、学生による活動を推進しており、これまで学生主体の企画展示の作成やギャラリートークを実施してきた。しかし近年は、Covid-19の拡大に伴って学生活動の規模が大幅に縮小され、やる気があっても行動できないという学生の声を多く耳にしていた。2022年の中ごろより、ようやく学生の活動に対する制限も緩和傾向にあったことから、本動画プロジェクトを通して学生へ更なる活動機会を提供することとした。また動画制作とそのため地域の調査を通して、広島大学が立地する東広島市の地域を、学生が知る機会を提供することも目的の1つとした。本プロジェクトでは、調査地域の決定は教職員サイドがおこない、動画の内容は学生たちが調査・決定した。今回の調査地域となった安芸津町は、広島県東広島市の南部に位置し、東広島市で唯一海に面した地域である。ジャガイモや柑橘類が特産であり、また海ではカキの養殖が盛んに行われている。これら特産物だけではなく、市の天然記念物に指定されている「大芝の褶曲した地層」や、世界でも例の少ない、生物によって浸食が進んでいる「ホボロ島」など、地学的要素も面白いものが多い。そこで本プロジェクトでは、安芸津の「地学」に焦点を当てて、地域調査と動画の作成を行った。また作成された動画は安芸津地域の小学校にも提供し、今後教材としての使用可能性も検討していく予定である。なお、今回は5名の学生が参加し、内訳は統合生命科学研究科1名（博士課程前期1年生）、生物生産学部1名（4年生）、理学部3名（3年生2名、2年生1名）であった。

ii 作業の進め方（実習の進行記録）

本プロジェクトでは、成果物としての動画を作成するにあたり、以下の作業工程にて実習を行った。

- ・実施場所の設定（期限の関係で事前に準備） 9月
- ・企画作成 9月～12月
- ・現地視察 10月
- ・シナリオの作成 10月～12月
- ・現地での動画撮影（業者委託） 12月
- ・ナレーション撮影（業者委託） 12月
- ・動画作成・編集（業者委託。校正は学生が実施） 12月～3月

打ち合わせや文献調査は合計10回、博物館事務室で行った。各回にメンバー5名がそろっていたわけではなく、基本的に3～4名での活動となるが多かった。来られないメンバーとの情報共有はLINEを通して行い、毎回の打ち合わせでは黒島が簡易の議事録を作成した。

現地調査には3名の学生と業者が同行し、スポットの選定と撮影時間の確認（海に面しており、潮の干満の影響が大きい）を行った。本撮影には学生全員が参加し、基本的に演者として動画に出演した。また業者側の厚意もあり、撮影の際に一部機器を学生が使用させていただいた。ナレーション撮りは本撮影の後に博物館事務室にて行った。

動画の編集作業は業者に一任したが、校正の確認やアニメーションの作成、写真の選定等は学生が主体となって行った。

iii 動画の内容（シナリオ）

タイトルは「安芸津ドライブ旅」であり、博物館を出発点として広島県東広島市安芸津町の地学的おすすめスポットを車で巡る内容となっている。めぐる場所は順に①大芝島、②選果場

即売所，③甲斐農園，④ホボロ島となっている。

①大芝島

見どころが多いため，ここだけで3か所をめぐる。まずは「ハート島」とも呼ばれる小芝島の風景を眺め，通称「大芝島のモンサンミッシェル」へと向かう。ここは満潮の時には離れ小島となるが，潮が引くと歩いて渡ることのできる小島であり，「陸繋島」「陸繋砂州」，このような環境ができる理由となる「潮の満ち引き」について学生が解説している。続いての「大芝島のしゅう曲構造」では，しゅう曲という地層の曲がりがどのようにできたかの解説や，実際にこの地で見つかった化石の紹介などを行っている。

②選果場即売所・甲斐農園

続いて訪れるのは，安芸津馬鈴薯選果場即売所であり，安芸津の特産品であるジャガイモの紹介である。安芸津の土は赤く，この赤土は鉄分に富み，水はけがよいことなどからジャガイモの栽培に適している。そのため安芸津町では「赤じゃが」という名で親しまれるジャガイモの生産が盛んである。実際にジャガイモを栽培している甲斐農園の様子も交えながら，安芸津のジャガイモと赤土について紹介している。このジャガイモを使用したコロッケやソフトクリームをほおばる様子も撮影した。

③ホボロ島

最後に訪れるのは，安芸津の南東部に位置する離れ小島，ホボロ島である。この島は年々小さくなっていっているが，問題はそのスピードであり，100年ほど前には20mほどあった海水面からの高さが，現在では干潮時でも6mほどしかない。その原因の1つに小さなダンゴムシのような生き物，ナナツバコツブムシが関わっている。この生物が穴をたくさん掘ることでそこに海水が浸透し，波による浸食が早く進行しているのではないかと考えられている。近い将来無くなっているかもしれない島の様子を，学生たちの解説と共に紹介した。

以上が動画の主な流れであり，初めて安芸津を訪れる人だけでなく，地域の子どもたちが，自分の生まれ育った地域を知るきっかけとなる動画を目指して作成した。

2) 熊原チーム「やってみよう地域調査—東広島市高屋町小寺池周辺の土石流と水害碑」

記：熊原康博

i 作成の意図

教育学部社会系コース及び大学院人間社会科学研究科教育科学専攻教師教育デザイン学プログラム社会認識教育学領域のチームでは，「学校現場で使える防災地域調査」と題して動画作成を行った。動画作成の意図を簡単に述べる。2022年度からはじまった高校の必修教科である「地理総合」では，単元の1つである「防災」と「地域調査」についてすべての高校生が学習することになる。「防災」と「地域調査」は，以前のカリキュラムである「地理A」で扱っていたものの，そもそも地理Aを受講する高校生は少なかった。一方，当コースの学生の多くは，卒業後に高校の地理歴史の教員を志望する。しかし，これまで地理Aの内容であった「防災」と「地域調査」については，学生自身ほとんど触れたことがない状態であった。そのため，防災を主題とした地域調査の手法について簡単に学べる動画があると教育的に意義があると判断した。

ii メンバー

当グループは、熊原を含め7名のメンバーからなり、いずれも教育学部社会系コース及び大学院人間社会科学研究科教育科学専攻教師教育デザイン学プログラム社会認識教育学領域の教員と学生である。メンバーは、広島県内の土石流災害を研究する博士課程後期の大学院生、現職の公立高校教員である博士課程前期の大学院生、防災教育の歴史を研究し、高校教員を志望する博士課程前期の大学院生、それぞれ小学校・中学校。高校の教員を志望する3名の学部4年生となっており、いずれも社会科及び地理歴史の教育や防災教育に強い関心をもつものからなる。

iii 取り組みの流れ

2023年7月11日に打ち合わせでは、以下の3点を考慮して動画を作成することとした。

- ①防災の地域調査を主題した動画作成を行うこと。
- ②小中高校の校種でも使えるような内容にすること。
- ③地形と人々の暮らしの関係について正負両面を指導できる内容とすること。

また対象地域を東広島市高屋町溝口にある小寺池周辺とした。その理由として以下の3点がある。

- ①2018年の西日本豪雨災害で農業用ため池に被害が生じたこと、
- ②過去の2回の土石流災害が生じたことを記録する2基の水害碑があること、
- ③すでに地元の方と知己であり、インタビュー調査が容易であることが挙げられる。

7月16日に、熊原が小寺池水利組合の方と打ち合わせを行い、こちらの意図とお願いを伝え、快く了解していただいた。また、水利組合の資料も頂いたが、過去の災害復旧に関する資料などは保管していないとのことであった。

7月26日には、メンバー全員で小寺池周辺のフィールドワークを行った。具体的には、小寺池の構造、周辺の地形、西日本豪雨の土石流の痕跡、用水路の配置、2基の水害碑の碑文の内容の観察を行った。観察を行った後で、小学校、中学校の社会科、高校の地理で扱う場合の授業案を各自考えることとした。

7月29日に、熊原が高屋西住民自治協議会の方と打ち合わせを行った。この協議会は、水害碑の活用を積極的に行っていることから、本研究においても支援をお願いしたところ、快諾を頂いた。

8月26日に、メンバーによる授業案を紹介してもらった。これは、7月26日のフィールドワークをもとに、「防災」を意識した地域調査の指導案（授業の目標、活動内容）を発表した。上記の指導案をふまえて、これらの指導を行うために必要となる、データの入手方法や聞き取り方法について検討をおこなった上で、それらを盛り込んだ動画作成の流れを検討した。また、この地域の3Dモデルを作成する検討を行った。

9月に、これまでの議論をふまえて動画のシナリオを作成した。

11月2日に小寺池周辺で動画撮影及びドローン撮影を行った。高屋西住民自治協議会の方に出演していただき、メンバーの学生と聞き取り調査をしている様子を撮影した。聞き取り内容は、小寺池の現在の管理方法、2つの水害碑の内容を周辺地域の住民はどの程度把握しているか？小寺池周辺の災害等について、地域で語り継がれている内容などはあるかについてなどである。

12月21日に、動画のコメント取りを行った。

1月末に動画の編集作業が終わり、いくつか修正を行った後、完成した。

iv シナリオ

ここでは、動画の内容について、動画で解説したコメントに即して紹介する。一部は、時間の関係でカットされているが、シナリオの意図を示すために、カットされた部分も含めて紹介する。

【作成意図】小学校では2年生の町探検・中学校社会科では地域調査・高校の地理総合では地域調査・防災など、学校現場では、生徒や児童に地域調査を指導する授業がそれぞれあります。地域調査は、実際に教える側が実際に調査のやり方やまとめ方を主体的に体験しておくことで、効率的にかつ効果的に教えることができます。社会科教員を志望する学生は、大学で地域調査を学ぶことが必要です。今回は、過去の災害に着目した地域調査を、東広島市高屋町にある小寺池周辺で行いました。

【地域調査の概要】地域調査は、大きく事前調査・現地調査・事後調査に分かれます。事前調査では、テーマ設定と、調査に必要なデータの入手を行います。現地調査では、事前調査をふまえて、実際の現地に出向いて、聞き取りや計測などの調査を行います。事後調査では、事前・現地で集めたデータを元に情報を整理して、他の方にわかりやすく伝えることを行います。

【事前調査】調査で大切なことは、どのようなテーマを設定するかです。今回は、過去の地域の災害について住民の方に効果的に伝えることを考えます。過去や現在の土地利用のことを知るデータとしては、「地理院地図」・「今昔マップ」・「空中写真」などがあります。今回は、空中写真のデータと地理院地図を使った作業を紹介します。国土地理院のサイトにある、「地図・空中写真閲覧サービス」から、欲しい地域、撮影年代の空中写真を選択して、ダウンロードします。今回は、昭和20年頃の写真と2018年頃の写真を入手しました。これをみると、谷筋に白い線のようなものが見えます。これが、土石流が流れた跡ですので、地理院地図に土石流が発生した地点を入れていきます。

【現地調査】現地では、空中写真で判読した土石流の跡をドローンで観察しました。ドローンの写真だと、谷の中を土石流が流れたことがよく分かります。池の中にまで土石流が入ってきたようです。また、この池の近くには、2つの水害碑があり、それぞれ江戸時代と昭和20年の土石流によって池に被害が生じたことを書いています。これらについても文字を判読し、実際に地元の方に当時の被害の様子について何うことを行いました。

【調査のまとめ】ここまで集めたデータを使ってどのように住民の方に過去の土石流災害を伝えたら良いのかを議論します。まず、分かったことを整理し、それを示す図・表・写真を作っていきます。小寺池には、江戸時代の土石流・昭和20年の土石流・西日本豪雨の土石流と少なくとも3回土石流がきていることがわかりました。また、小寺池の上流で発生した土石流地点を確認すると、まだ土石流が発生していないと思われる無数の谷があり、これらの谷で土石流が発生する可能性があることが伺えます。これらのことを、パワーポイントやポスターにしてわかりやすく提示します。

3) 匹田チーム「地域のおいたちを発掘し表現するプロジェクト」

記：匹田 篤

i プロジェクトの概要

情報メディアの特性を学んだ学生(学部3年生)に対して、地域の紹介動画の制作を通じて、メディアの送り手を体験することともに、地域調査、フィールド調査への興味を高めることを本プロジェクトの目的としている。

自分たちの住む東広島市の西条駅から広島大学までのエリアについて、その地域の生い立ちを外の人に紹介する動画を作成する。この作業を通じて、地域資源に対する魅力の再認識をねらうとともに、メディア表現の技術を習得する。

ii 作業の進め方（実習の進行記録）

全8回の授業のうち、4回目から8回目の5回分を動画作成に充てた。

動画作成に取り掛かる前に、学生たちは3回の授業において、メディアの特性、特に静止画の構図について説明と演習をおこない、また雑誌の紙面のレイアウトについてカラムグリッドレイアウトの説明と雑誌の紙面の観察をおこなっている。

動画作成に充てた全5回の授業の内容を以下に示す。各回は90分 x 2コマの180分である。
第1回：テレビ番組の観察：NHK ブラタモリを鑑賞し、番組の構成について学ぶ。

自分たちの地域で番組をつくるとしたら、どのようなテーマにするか検討する。

最後に、学生それぞれがテーマを提出する

第2回：テーマの人気投票をおこない、20人の学生をテーマ毎4つのグループに分けた。

地域情報として『西条地歴ウォーク』（横川・熊原編、2020）をもとに、内容の検討。

グループ毎に構成表を作成し提出する。

また、グループ内での役割分担を決めた。

（ディレクター、カメラマン、編集、出演者、ナレーター）

第3回：グループ毎に構成表と実際の撮影スケジュールの検討。

アクションカメラ（GoPro など）とワイヤレスマイクを各グループに貸し出し。

第4回：各グループで撮影、編集

第5回：作品提出。鑑賞。

iii 動画の内容（シナリオ）

グループは以下の4つである

1 グループ：「廣大生が歩いてみた“一本の道”から発展した西条下見」

2 グループ：「廣大生の西条さんぽ」

3 グループ：「西条の過去と未来～学園都市の今だけじゃない西条の過去と未来」

4 グループ：「菖蒲の前伝説～平安時代と令和西条のつながり」

本プロジェクトでは動画の構成を「ハ・ゲ・グ」と考えさせている。ハ：ハッとする。ゲ：ゲッと思う、グ：グッとくる、という意味である。

各グループには5分間程度の映像作品の中で、「ハ・ゲ・グ」の構成を検討させ、その後、撮影に出かけさせた。それぞれのシナリオは以下の通りである。

表1 1グループ：「廣大生が歩いてみた“一本の道”から発展した西条下見」

構成	内容
ハ	広島大学から歩いて出発。下見7丁目から歩き始める 下見街道沿いに、6丁目、5丁目と歩いていく
ゲ	下見5丁目のつぎには、西条下見という地名になり 下見4丁目がないことに気が付く
グ	下見の計画と、それ以前の下見街道の歴史を紹介する

表 2 2 グループ：「広大生の西条さんぽ」

構成	内容
ハ	東広島市の玄関口である西条駅を紹介 西条駅から西に向かって歩き始める
ゲ	小川（半尾川）に沿って歩き、西条東交差点に到着する 西条駅から西に向かったのに西条東であることに気が付く
グ	先ほど歩いてきた半尾川を境に西が西条、東が東条であったこと 街の発展により、次第に西条だけが呼ばれるようになったことを説明する

表 3 3 グループ：「西条の過去と未来～学園都市の今だけじゃない西条の過去と未来」

構成	内容
ハ	自分たちの通う広島大学と、その隣にある下見のショッピングセンター 西条は広島大学が移転するよりずっと昔から、人々が生活していた
ゲ	旧石器時代や縄文時代の石器が見つかっている 源頼政の妻、菖蒲の前が城を立てたのが二神山である
グ	道の駅もでき、来春には安芸バイパスもつながり、さらに発展することを紹介

表 4 4 グループ：「広大生が歩いてみた“一本の道”から発展した西条下見」

構成	内容
ハ	広島大学の東に御園宇という地名がある。 そこには吾妻子の滝や観音堂がある
ゲ	平安時代に源頼政の妻、菖蒲の前がこの地に逃げたさいに、 種子若丸をこの地で亡くし、御堂を立てたことに由来する
グ	源氏に追われた菖蒲の前は、西の小倉山に逃げた その場所に小倉神社が建てられ、雨乞いの神として農民に信仰され続けた

V 地域調査実習への示唆

3つのプロジェクトを実際に行い、その過程を経験したことにより、動画制作を地域調査実習に組み込むことのメリットやデメリットを検討する。その際に、2つの切り口からアプローチした。1つは実際にプロジェクトに携わった担当者が、実際に行ったことで得られた気づきである。担当した3名（本研究の共同研究者）に、地域調査実習への期待・利点・課題、動画づくりを組み込むことのメリット・デメリットについて、自由に記述してもらった。

また、もう1つは、参加した学生に対するアンケート調査である。アンケート調査では参加者と対照するために、動画制作に参加しなかった広島大学総合科学部社会探求領域の学生に対しても同じアンケートを行った。アンケートの実施は2023年3月で、回答者数は35名であった。

1) 指導した側の自己評価・反省点

i 黒島・浅野チーム

記：黒島健介

今回の動画作成では、地域の選定のみ教職員が行い、めぐるべきスポットの選定と解説文の作成等は学生の手により行われた。博物館の学生スタッフということもあって、さまざまなバックグラウンドの学生が参加することで、いわゆる地学のみにとらわれない動画が作成できたのではないかと考えている。昨今の動画投稿サイトの隆盛も相まって、地域調査系実習として動画を作成する取り組みは、学生達のモチベーションの向上と、世に出ることに伴う責任感の醸造につながるのではないかと感じた。

大学内での文献調査では、理学部地球惑星システム学科の学生2名がいたことで、他の学生たちの地学的要素への理解が深まった。また今回、動画の作成経験のある学生がいたことで、シナリオの作成や構図の決定、簡易絵コンテの作成等、動画撮影に必要な下準備がスムーズに進行した。もともと博物館での活動を一緒に行っているメンバーでもあったが、今回の動画作成を機に、より学生同士の交流が深まっていたことも実感した。さらに、見やすい・分かりやすい動画を作成するため、アニメーション部分は自分達で作成し、追加での写真撮影を行うなど決められた期間内でより良いものを作ろうと努めたことによって、業者に任せきってしまうことなく、自分たちの意見がしっかりと反映された動画となった。

本動画は堅すぎることもなく、学生たちの楽しそうな様子も伝わることから、子どもたちにとっても楽しめる動画になったと感じる。安芸津地域において、小学校でこの動画を活用してもらうことで、地域の子どもたちが自分たちの生まれ育った場所を楽しく知ることができ、またより深く知るためのきっかけづくりとして活用できる。

一方で、今回の動画作成では学生たちがしっかりと意見を出したこともあり、動画の撮影・編集を依頼した業者での撮影・校正作業が一部スムーズに進行しなかった。特に学生スタッフ達は、自分たちで展示を作成し、解説もできるメンバーがそろっており、過去に動画を作成して公開していたメンバーもいた。業者の考える動画（広島大学総合博物館としての動画）と、学生の考える動画（より面白く作成された動画）の間に乖離があったことも相まって、業者からでてくる校正に対して疑問・意見が噴出する、という場面も見受けられた。実習として動画を作成する際にも、学生たちの属性や能力・やる気を加味し、業者に依頼するのか、あるいは道具のみ提供し、自分たちでの動画作成とさせるのかを学生たちと十分に話し合っておく必要があると痛感した。

また、学生の移動に関しては、学生メンバーが最大5名であったことから現地の視察や撮影の際の移動は教職員が車で送迎する形をとったが、人数が増加した場合には鉄道など公共交通機関での移動やマイクロバスのレンタル等の費用もかかるようになる。また今回は授業ではなかったため、学生たちの予定を合わせるのが難しく、視察・本撮影を1回ずつのみ行い、地域調査にあたる部分は大学内での文献調査が主であった。実際に授業として行う場合には予定を合わせる難しさは減ると考えられるが、それでも集中形式の場合には土日祝も含めた調整が必要となる。これらを踏まえると、実習としての地域調査を通した動画作成は、徒歩や自転車移動圏内で行うことが現実的かもしれない。

以上のように、地域調査としての動画作成は、成果物が目に見える形で残り、学生同士の交流も進んだことから、十分に実習として価値のあるものであると感じる。また地域の子どもたちに向けて作成し、実際に見てもらうことで、大学生のみならず地域の子どもたちにとっての地域学習につながると期待される。今後実習として行う際には、上述の結果を踏まえたうえで

学生の主体性を失わないよう注意しながら実施していきたい。

ii 熊原チーム

記：熊原康博

今回、1つの動画作成というミッションで、それに向けて準備を進めたが、地域調査を1つの短い動画で説明することは難しい。一方で、長い動画だとダレてしまう問題もある。地域調査を網羅的に動画で解説するためには、シリーズものにして、1つの内容（例えば、空中写真の活動）で1つの動画にしていくなどの工夫が必要であると考えます。

iii 匹田チーム

記：匹田 篤

・動画の撮影編集について

動画の撮影については、ワイヤレスマイクを貸し出したことがとてもよかったと考える。動画編集については特に指導はしなかったものの、各グループの編集担当者同士が助け合いながら、自主的にパソコンで編集を進めたことは、学生の積極性を出すことができたと感じている。

グループ内で担当（ディレクター、カメラマン、編集、出演者、ナレーター）を決めさせたことで、各学生の役割が明確になり、特定の学生への作業の偏りが減り、全員で作成することにつながったと考える。担当を決めることは、メディア作成におけるチームワークの重要性、番組の構成表などでメッセージや表現をチーム内で共有することの意義を認識させることにもつながったようである。

一方で、学生が所有している大学指定のパソコンは、購入後3年が経過しており動画編集には適していない。大学としてある程度の動画編集環境をハードウェア、ソフトウェアともに提供することが必要だと考える。

・シナリオについて

シナリオの検討には想定していたより時間がかかった。動画を見ることはあっても、作り手の経験に乏しいため、短い動画に多くの情報を盛り込もうとする傾向があった。

シナリオについて、異なるテーマのグループにわけたものの、内容に重なりが生じてしまった。他のグループとの意見交換をおこなう時間をとるべきであった。

・動画作成に対する関心の高さ

動画作成をおこなうことで、地域情報の収集、表現について、学生たちが（ポスター制作などと比較して）より積極的に関わっていたと感じた。一方で、観察したテレビ番組に影響された部分も大きく、他の番組も観察させてもよかったと感じた。

全体的に、動画制作をしていく中で、学生たちにとっての日常生活の場に対して、より興味をもってくれたと感じた。今後、地域の人にインタビューするなど、人との交流を取り込んでいくことができれば、より地域の愛着へとつながっていくものと考えます。

2) 地域調査実習についての学生アンケートの結果

調査は2023年3月1日から3月30日まで、Google フォームを用いて行った。対象者は、プロジェクトに参加した32名（黒島・浅野チーム5名、熊原チーム7名、匹田チーム20名）とプロジェクトに参加していない総合科学部社会探求領域専攻の学生124名とし、回答者数はプロジェクト参加者18名（各チームはそれぞれ4名、5名、9名）、非参加者17名の、合わせて35名であった²⁾。アンケート調査の結果の概要を以下に記す。

まず、回答者の属性について、回答者の学年は、図1に示した通り、学部2年生が2割、3年生が4割、4年生が3割、大学院生が1割となった。このあとの質問への回答結果と学年に

よる違いについてクロス集計を行ったが、学年による特徴的な違いは特に認められなかった。「あなたはこれまでに、地域調査系の演習・実習にどの程度参加したことがありますか」との質問に対して、詳しくは図2に示すが、あとの集計では、3回以上、1,2回、0回（不明）の3つに分けた。それぞれ回答者の、34.3%、34.3%、31.5%とほぼ3分の1ずつになっている（小数点第2位以下を四捨五入しているの合計して100%にならないことがある。以下同じ）。今回のプロジェクトに参加したか否かについては、参加した者が51.4%、参加していない者が48.6%となった（図3）。

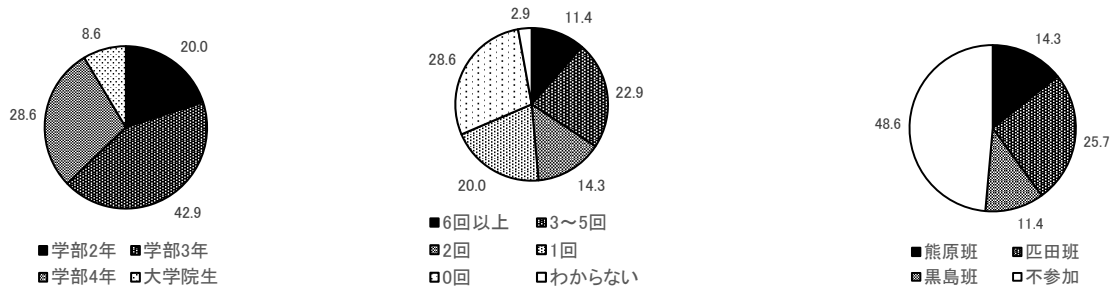


図1 回答者の学年 (回答者数 35人) 図2 地域調査実習等への参加回数 (回答者数 35人) 図3 参加した作業チーム (回答者数 35人)

プロジェクトに参加した18人に「今回の動画制作プロジェクトはあなたの興味・関心を引いたか」と訪ねたところ、「とてもひかれた」が33.3%、「まあひかれた」が66.7%となり、全員の興味・関心を引いたことが確認できた（図は略）。その理由としては、「地域を知る機会になること」がもっとも多く66.7%と突出する一方、フィールドに出ること自体への関心や、地域を他者に伝える機会になることを選ぶ者もいた（図4）。

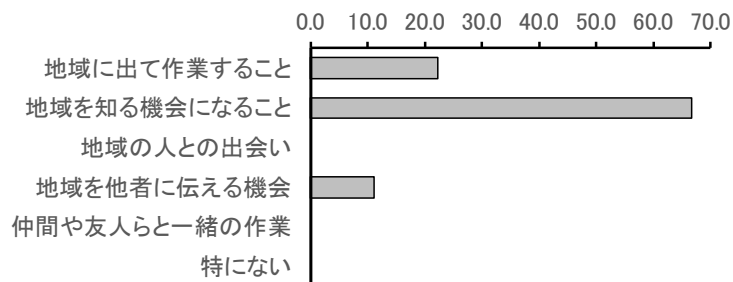


図4 どのような点が、あなたの興味・関心を引きましたか (回答者数 18人)

次に、「地域調査系の演習・実習を受講する際に、何を期待しますか」と地域調査実習等への期待を複数回答可で尋ねた（図5）。「調査の手法や段取りを学ぶこと」を6割の学生が選んでおり、調査の仕方への関心が高い。ついで、「対象地域を詳しく知る」ことや「新しい知見を増やす」などが選択されている。ここでは、友人関係や単位取得に関連する動機はわずかであった。

この「期待すること」と図2に示した「参加回数」をクロス集計する（表5）と、参加回数の多寡による差が見られ、3回以上では「対象地域を詳しく知る」や「地域の人との出会いや交流」の割合が相対的に高く、1,2回の場合は、「地域調査の体験」、「新しい知見を増やす」「地域の課題解決への一助となる」の割合が高かった。回数が少ない場合は、地域の問題に関心が

ある人が現地を知ってみたいという動機、あるいは、とにかく地域調査なるものを経験してみたいという動機が強いといえそうである。

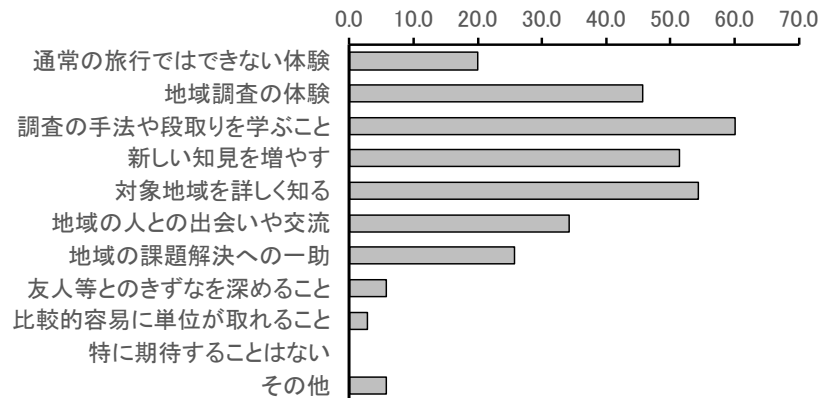


図 5 地域調査実習等の受講する際の期待（複数回答・回答者数 35 人）

表 5 「参加回数」と「地域調査演習・実習への期待」の関係

	(単位%, 35人回答)		
	3回以上	1,2回	0回・不明
通常の旅行ではできない体験	16.7	16.7	27.3
地域調査の体験	33.3	58.3	45.5
調査の手法や段取りを学ぶこと	58.3	58.3	63.6
新しい知見を増やす	50.0	66.7	36.4
対象地域を詳しく知る	66.7	41.7	54.5
地域の人との出会いや交流	58.3	16.7	27.3
地域の課題解決への一助	16.7	41.7	18.2
友人等とのきずなを深めること	8.3	8.3	0.0
比較的容易に単位が取れること	0.0	0.0	9.1
特に期待することはない	0.0	0.0	0.0
その他	8.3	0.0	9.1
回答者数(人)	12	12	11

表 6 「今回のプロジェクト参加」と「地域調査演習・実習への期待」の関係

	(単位%, 35人回答)	
	参加	不参加
通常の旅行ではできない体験	22.2	17.6
地域調査の体験	22.2	70.6
調査の手法や段取りを学ぶこと	44.4	76.5
新しい知見を増やす	61.1	41.2
対象地域を詳しく知る	66.7	41.2
地域の人との出会いや交流	44.4	23.5
地域の課題解決への一助	33.3	17.6
友人等とのきずなを深めること	5.6	5.9
比較的容易に単位が取れること	0.0	5.9
特に期待することはない	0.0	0.0
その他	5.6	5.9
回答者数	18	17

同じく「期待すること」と「今回のプロジェクトに参加したか否か」でクロス集計する（表6）と参加したかしなかったかで、回答に差が見られた。参加した場合は、対象地域を詳しく知ることや、新しい知見を増やすことなどの割合が高く、参加しなかった場合は、地域調査を体験することと、調査の手法や段取りを学ぶことの割合が高くなった。

次に、「地域調査系の演習・実習を体験したことがある場合、あなたが地域に出ることのできたこと・気づいたことにどのようなものがありますか」と複数回答で尋ねたところ、「地域の自然や社会の特徴を知ること」を約6割の回答者が選び、他の選択肢を大きく引き離れた（図6）。

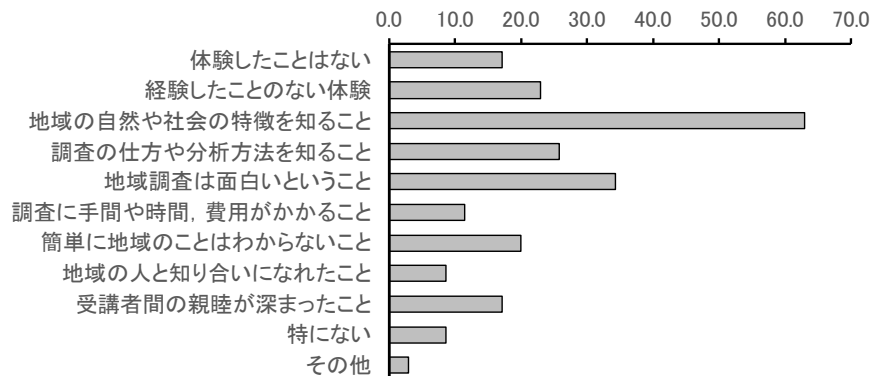


図6 地域調査実習等で得たこと・気づいたこと（複数回答・回答者35人）

この質問についても、参加回数とのクロス集計を行った（表7）。参加回数が少ない場合は、これまでに経験したことの無い体験ができたこと、地域の自然や社会の特徴を知ることができたこと、調査の仕方や分析方法を知ることができたことの割合が高く、参加回数が多い場合は、地域の自然や社会の特徴を知ることができたことを全員が選んだほか、地域調査が面白いことに気づく、簡単に地域のことはわからないことがわかるなど、学びが深まっていることをうかがい知る結果になった。

表7 「参加回数」と「実習演習で得たこと・気づいたこと」の関係

	(単位%, 35人回答)		
	3回以上	1,2回	0回・不明
経験したことの無い体験	25.0	41.7	0.0
地域の自然や社会の特徴を知ること	100.0	66.7	18.2
調査の仕方や分析方法を知ること	33.3	41.7	0.0
地域調査は面白いということ	58.3	25.0	18.2
調査に手間や時間、費用がかかること	0.0	16.7	18.2
簡単に地域のことはわからないこと	33.3	16.7	9.1
地域の人と知り合いになれたこと	8.3	16.7	0.0
受講者間の親睦が深まったこと	25.0	25.0	0.0
特にない	0.0	0.0	27.3
体験したことはない	0.0	8.3	45.5
その他	0.0	0.0	0.0

今回のプロジェクトへの参加の有無とのクロス集計も明らかな差が認められ、参加した回答者は、多くの選択肢を選んでおり、今回以外にも実習等への参加回数が多いためか、体験できたこと自体を選ぶことが少なかった（表8）。

表 8 「今回のプロジェクト参加」と「実習演習で得たこと・気づいたこと」の関係

	(単位%, 35人回答)	
	参加	不参加
経験したことのない体験	5.6	29.4
地域の自然や社会の特徴を知ること	22.2	23.5
調査の仕方や分析方法を知ること	77.8	47.1
地域調査は面白いということ	22.2	29.4
調査に手間や時間、費用がかかること	55.6	11.8
簡単に地域のことはわからないこと	16.7	5.9
地域の人と知り合いになれたこと	27.8	11.8
受講者間の親睦が深まったこと	11.1	5.9
特にない	16.7	17.6
体験したことはない	0.0	17.6
その他	0.0	0.0

「今回の作業をはじめ、地域調査系の演習・実習を体験したことがある場合、演習・実習を通じて、訪れた地域に対する関心は高まりましたか」との問いに対しては、地域調査を体験することで対象地域に対する関心を高めることが確認できた（図 7）。

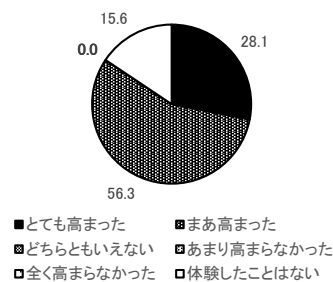


図 7 実習等を通じて地域への関心は高まったか（回答者数 35 人）

「地域調査系の演習・実習を受講するとして、身につけたいことはなんですか」（複数回答）との問いに対しては、調査計画の立て方、文献・資料の探し方、調査で得た情報の整理・分析方法の 3 項目の割合が高かった（図 8）。この点は、実習を担当する身として意識しておく必要がある。この 3 項目以外の選択肢もほぼまんべんなく選ばれており、学生の要求は多岐にわたっているといえそうである。

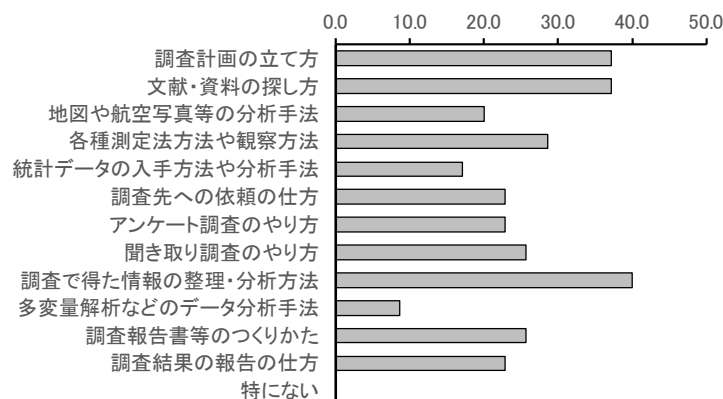


図 8 地域調査実習等で身につけたいこと（複数回答・回答者数 35 人）

これについても、参加回数と、今回のプロジェクトへの参加の有無によるクロス集計を行った。これまで同様に、参加回数の多寡、今回の参加の有無によって回答の傾向に差が認められた。参加回数に関しては、回数が少ない場合は、調査計画の立て方や文献・資料の探し方、聞き取り調査の仕方、情報の整理・分析方法、調査結果の報告の仕方などの基本的なことへの関心が高く、回数が多くなると、地図や航空写真の分析手法、各種測定方法や観察方法、統計データの入手方法や分析手法、多変量解析などの分析手法といった段階の進んだ手法等へのニーズが高くなる（表 9）。これは実習の数をこなすうちに、経験値が高まっていることの反映であり、学習の成果が現れているともいえそうである。

また、今回のプロジェクトに参加したか否かでも差が見られるが、これは動画を作るという作業を体験する中で必要性を感じたものが選ばれている（表 10）。筆者が学生らの作業を見ている中でも、動画を作る際に、調べるべきことがいろいろ出てきており、資料の必要性を感じる場面があったように思う。また、動画を作るという課題に挑んでいるので、調査結果の報告の仕方を選ぶ割合が高くなったと考えられる。

表 9 「参加回数」と「地域調査演習・実習で身につけたいこと」の関係

	(単位%, 35人回答)		
	3回以上	1,2回	0回・不明
調査計画の立て方	33.3	50.0	27.3
文献・資料の探し方	25.0	41.7	45.5
地図や航空写真等の分析手法	33.3	0.0	27.3
各種測定方法や観察方法	33.3	16.7	36.4
統計データの入手方法や分析手法	33.3	8.3	9.1
調査先への依頼の仕方	0.0	0.0	0.0
アンケート調査のやり方	25.0	25.0	18.2
聞き取り調査のやり方	16.7	33.3	27.3
調査で得た情報の整理・分析方法	25.0	58.3	36.4
多変量解析などのデータ分析手法	25.0	0.0	0.0
調査報告書等のつくりかた	25.0	25.0	27.3
調査結果の報告の仕方	8.3	50.0	9.1
特にない	0.0	0.0	0.0

表 10 「今回のプロジェクト参加」と「地域調査演習・実習で身につけたいこと」の関係

	(単位%, 35人回答)	
	参加	不参加
調査計画の立て方	38.9	35.3
文献・資料の探し方	50.0	23.5
地図や航空写真等の分析手法	22.2	17.6
各種測定方法や観察方法	27.8	29.4
統計データの入手方法や分析手法	11.1	23.5
調査先への依頼の仕方	0.0	0.0
アンケート調査のやり方	11.1	35.3
聞き取り調査のやり方	22.2	29.4
調査で得た情報の整理・分析方法	44.4	35.3
多変量解析などのデータ分析手法	5.6	11.8
調査報告書等のつくりかた	16.7	35.3
調査結果の報告の仕方	27.8	17.6
特にない	0.0	0.0

最後に、「演習・実習の中に地域調査の成果を動画としてまとめてそれを発信することについて、あなたはどのように評価しますか」の質問に対して、よいとの評価が9割以上になって

おり（図 9），学生から好意的に評価されている。その理由としては，具体的な目標を持てることがもっとも多く（図 10），次いで，調査協力者に成果を返せることや，調査結果が埋もれないですむことが選ばれている。一方で，マイナス評価の理由としては，手間と時間がかかることがあげられている。また，成果の出来に自信がもてないことも躊躇する一因となる。

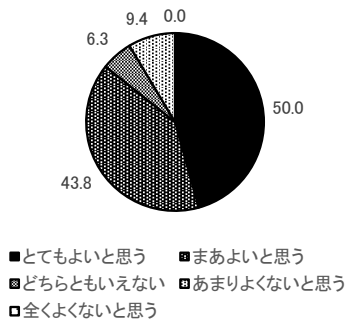


図 9 成果を動画で発信することの評価
(回答者数 35 人)

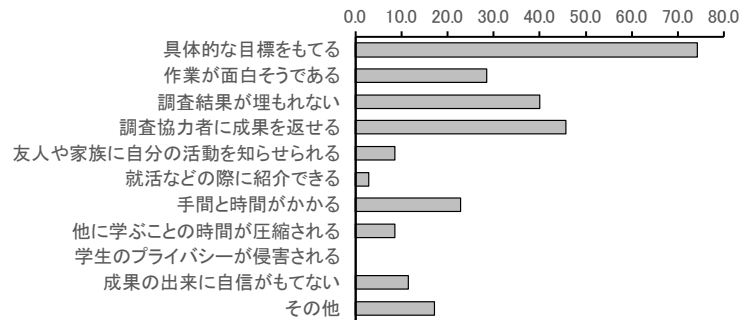


図 10 動画による発信を評価する理由
(複数回答・回答者数 35 人)

「参加回数」と「動画による発信を評価する理由」の関係を見ると（表 11），地域調査実習等に参加したことがある人とない人の差は顕著で，参加したことがない場合はマイナス評価，特に面倒な作業ととらえる傾向がある。回数が多い場合と少ない場合とでは，多い場合に，調査協力者に成果を返せることや，調査結果が埋もれないですむことの割合が高くなり，学生に調査を行うことでの地域に対する責任感が生まれるように見える。

今回のプロジェクトに参加したか否かでも顕著な差が認められ（表 12），参加した人は，具体的な目標をもてること，作業が面白そうだということ，調査結果が埋もれないですむことの割合が高くなった。動画制作を課題とすることで，実習の目的な明確になるとともに，作業の面白さを訴えることができるといえそうである。逆に，参加していない場合は，成果の出来に自信がもてないというマイナス評価をする割合が高く，動画を作ることが受講のハードルを上げてしまう可能性があるともいえる。

表 11 「参加回数」と「動画による発信を評価する理由」の関係

	(単位%, 35人回答)		
	3回以上	1,2回	0回・不明
具体的な目標をもてる	83.3	83.3	54.5
作業が面白そうである	16.7	50.0	18.2
調査結果が埋もれない	58.3	33.3	27.3
調査協力者に成果を返せる	66.7	50.0	18.2
友人や家族に自分の活動を知らせられる	16.7	8.3	0.0
就活などの際に紹介できる	0.0	8.3	0.0
手間と時間がかかる	16.7	8.3	45.5
他に学ぶことの時間が圧縮される	0.0	0.0	27.3
学生のプライバシーが侵害される	0.0	0.0	0.0
成果の出来に自信がもてない	0.0	8.3	27.3
その他	25.0	16.7	9.1

表 12 「今回のプロジェクト参加」と「動画による発信を評価する理由」の関係

	(単位%, 35人回答)	
	参加	不参加
具体的な目標をもてる	83.3	64.7
作業が面白そうである	33.3	23.5
調査結果が埋もれない	50.0	29.4
調査協力者に成果を返せる	44.4	47.1
友人や家族に自分の活動を知らせられる	11.1	5.9
就活などの際に紹介できる	0.0	5.9
手間と時間がかかる	22.2	23.5
他に学ぶことの時間が圧縮される	5.6	11.8
学生のプライバシーが侵害される	0.0	0.0
成果の出来に自信がもてない	5.6	17.6
その他	16.7	17.6

VI おわりに

本研究では、地域調査のアウトプットとして動画を制作することにしたとすると、何が期待でき、どういう問題があるのかを明らかにすることを目的としていた。これに対して、動画制作プロジェクトを立ち上げ、実際に指導した教員の立場から、参加した学生の様子を観察するという視点、ならびに動画制作を終えたあとでアンケートに答えてもらったり、試写会などで意見を述べてもらったり³⁾ という学生の視点、のそれぞれから情報を集めて検討した。

簡単にそれらをまとめると、第一に今回プロジェクトに参加した学生は総じて作業を楽しんでおり、熱心に参加していた。このことがもっとも強く感じられたところである。主体的・積極的に作業を進めていた姿は印象的であった。そのことはアンケート調査の結果にも現れている。実習の目標が明確になるとの高評価が実習に参加することへのモチベーションを上げることにつながるるとともに、地域調査を行った結果を地域に還元できることへの安堵感、さらにプロジェクトに参加したことで、より段階の進んだ技術やノウハウへのニーズを高めることにつながっている。

なお、今回のプロジェクトに限らず、地域調査実習等を受講する際に、学生が技能的な学びを求めていることが再認識できた。これは動画制作を取り込むか否かに関係なく、実習等の授業を担当する上では留意しておくべきことであろう。

一方で、課題もある。1つは、授業として行う実習では単元に割ける時間が限られており、動画制作のプロセスを組み込むと他のことをする時間を圧縮してしまう。しかも、今回の活動において、休日などに作業時間を作ったり、夜遅くまで作業を行ったりと、学生の負担が大きかった。それでも参加した学生はその過程を楽しんでいたのは、アンケートの高評価が示す通りである。実習に参加経験のない学生の懸念もこのあたりにある。もう1つの問題として、費用の負担が大きいこともあげられる。アンケートへの回答で、プロジェクトに参加することで、費用がかかることを知ったとの回答がやや多くなったが、参加した学生に予算管理についても実情を伝えながら(学生にブレーキをかけながら)作業を進めたチームがあり、そのことが「お金がかかる」という認識につながったようにも思われる。地域調査実習に動画制作を組み込むためには、予算の獲得を合わせて考える必要がある。

この点については、今回制作した動画をどう活用するかが関わってくる。今回の動画については広島大学総合博物館が行う、地域まるごと博物館のデジタルコンテンツ(川島ほか, 2022)の1つとして発信することを計画段階から想定しており、YouTubeで配信する。地域まるごと

博物館のコンテンツが充実していけば、小学校での授業教材にも使えるし、熊原チームの動画のように高校での地理教育での利用を意識できるものもある。学校教育の教材としての利用を訴えることで外部から予算を獲得することも検討する余地がある。動画を制作した場合、どのように公開するか、どのようにそれを利用するかもしっかり考える必要がある。

謝辞

本研究は公益財団法人国土地理協会の 2022 年度学術研究助成による成果である。また、これに加えて、広島大学総合科学部の総合科学推進プロジェクトの助成も受けており、2 つの助成金を合わせて実施したものである。それぞれに感謝申し上げる。

注

- 1) 本研究では、地域調査を通じて、地域の何を対象とするか、そのように情報を収集するか、それをどのように表現するかを体験的に学ぶことに主眼をおいている。そのために、黒島・浅野チームと熊原チームでは、動画を撮影・編集する技術的な部分は専門業者に委託した。匹田チームでは、対象とした授業の性格上、受講した学生が自ら撮影や編集も行った。
- 2) 調査時期が、大学に学生が少ない 3 月に行ったので、100 名以上いる社会探求領域の学生のうち回答したのは 17 名にとどまった。しかし、そのことが結果的に、プロジェクト参加者と非参加者の数がほぼ同数になることにつながった。
- 3) 動画が全て完成したあとで、年度を越して 4 月 12 日に試写会を実施した。興味を持つ学生や教員を集めて、動画 6 本を視聴したあと、自由に意見交換を行った。そこでの意見を本稿では記載していないが、考察に際してはそこでの意見も参考にしている。

文献

- 川島尚宗・黒島健介・石丸恵利子・塩路恒生・池田誠慈・清水則雄・浅野敏久 (2022) : 広島大学総合博物館のキャンパスまるごと博物館・地域まるごと博物館構想におけるデジタルコンテンツの作成. エコミュージアム研究, 27, 3-8.
- 河本大地 (2017) : 大学初年次における「身近な地域」の調査とウィキペディア編集. E-journal GEO, 13, 534-548.
- 池俊介 (2012) : 地理教育における地域調査の現状と課題. E-journal GEO, 7, 35-42.
- 磯野巧・宮岡邦任 (2017) : 地方国立大学の社会科教員養成課程における地理学的フィールドワーク教育の再構築に向けた一考察. E-journal GEO, 12, 233-245.
- 横川知司・熊原康博編著 (2020) : 『西条地歴ウォーク』レタープレス.